

「モビリティDXプラットフォーム」について

- 2024年5月に策定した「モビリティDX戦略」に基づき、様々な企業・人材・情報が集積・交流する新たなコミュニティとして2024年10月に「モビリティDXプラットフォーム」を立ち上げました。
- 「モビリティDXプラットフォーム」では、我が国のモビリティ産業の発展のために、各種イベントや会員活動を通じて機運醸成を図り、自動車業界と多様な業界の関係者との交流を促進してきました。⇒参考① (3-6p)
- その結果、直近では、「モビリティDXプラットフォーム」の活動を一つの契機として、各領域に強みを持つプレイヤーの方々が連携を強化する自発的な取組が各所で生まれつつあります。業界や領域を超えた連携を今後さらに促進していくためには、こうした自発的な取組が継続的に創出される、持続可能なエコシステムの形成が不可欠です。
- 持続可能なエコシステムへの転換を具体的に進めていくため、これまでの「モビリティDXプラットフォーム」の活動において、他業界や海外のエコシステムの事例も参照し、エコシステムに必要と考えられる機能の整理を行ってきました。今後、これらの機能を担う主体が増え、取組が拡大していくことが重要です。
 - ✓ 具体例として、民間事業者主導のエコシステムにおいて必要と考えられる機能例を整理しています。⇒参考② (7p)
 - ✓ 把握できている範囲において、これらの機能を担うプレイヤーや具体的な取組の事例を可視化しています。⇒参考③ (8-23p)
- また、現在モビリティDX領域において、特に重要なテーマの一つがSDV (Software Defined Vehicle) を巡る技術構造の変化です。SDVでは、高効率かつ高頻度でソフトウェアのアップデートを行うことが求められ、米国や中国を中心にミドルウェア、OS、半導体など、車両全体のアーキテクチャにおいてもレイヤー化が進展しています。今後、エコシステムでの取組を加速していくためには、こうしたレイヤー構造を意識し、レイヤーごとの課題や論点を明確化した上で議論を深めていくことも重要です。
 - ✓ 経済産業省では、2026年2月12日に開催されたAI・半導体ワーキンググループにおいて、SDVにおけるレイヤードアーキテクチャの考え方を提示しました。⇒参考④ (24p)
 - ✓ 参考例として、SCSK様が整理された「SDV時代のレイヤー別多業種連携図」を提示します。⇒参考⑤ (25p)

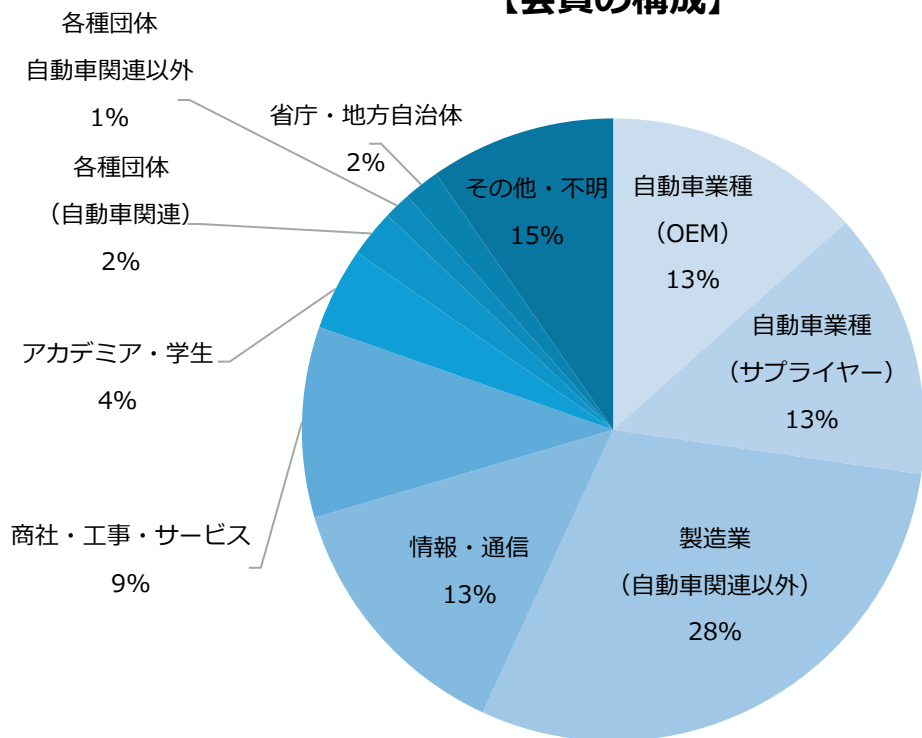
「モビリティDXプラットフォーム」について

- こうした取組を踏まえ、今後は、民間事業者主導で多様なコミュニティが次々と生まれるエコシステムを強く支援し、各領域に強みを持つプレイヤーの取組が有機的につながり、それによって業界・領域を超えた多様な関係者が巻き込まれていくことで、我が国モビリティ産業の発展と国際競争力強化の基盤となることを目指していきます。
- この方針に基づき、エコシステム形成の第一段階を担ってきた「モビリティDXプラットフォーム」における、会員登録機能および会員の皆様へのメール配信は終了し、初年度に「モビリティDXプラットフォーム」の事務局を担っていただいた自動車技術会において、関連情報の発信を行っていきます。引き続き会員の皆様が継続的に人材育成や協業連携に関するイベント情報や、モビリティDX領域の最新動向に関する情報に触れる機会を確保できるようにします。⇒参考⑥（26p）
 - ▶ <https://guide.jsae.or.jp/>
- 上記サイトにおいて参考③の事業者の方々の取組等も含めてモビリティDX領域の最新動向を入手していただけます。今後、モビリティDX関連のコーナーが開設されるなど、アップデートがなされていきます。
- また、参考③（8-23p）において、事業者のモビリティDXに関する取組のリンクを掲載していますので、そちらもご覧ください。
- なお、モビリティDXプラットフォームのこれまでの取組については2027年3月31日まで本Webサイトに掲載され、以降は経済産業省のWebサイトに掲載予定です。
 - ▶ https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/automobile/index.html
- 経済産業省としても、引き続き自発的な取組が継続的に創出される、持続可能なエコシステムに向けて取り組んでまいります。

(参考①) モビリティDXプラットフォームの概要 (会員情報)

- 2024年10月にモビリティDXプラットフォームをローンチ後、構築したWebサイト上に会員登録フォームを設け、会員を募集。登録した会員向けには、ニュースレターや記事、モビリティDXプラットフォームで実施するイベント等の情報発信を実施。
- 会員の所属組織には自動車業界のみならず、スタートアップ・異業種・アカデミア・自治体等が含まれる。

【会員の構成】



【会員所属組織例】

自動車業種	異業種
<ul style="list-style-type: none"> 完成車メーカー 部品メーカー 	<ul style="list-style-type: none"> クラウド事業者 通信事業者 サイバーセキュリティ事業者 地図データ事業者 AI事業者 ソフトウェアベンダー 決済事業者 保険会社 リース会社 インフラ運営事業者
	<ul style="list-style-type: none"> モビリティサービス事業者 アフターサービス事業者 人材サービス事業者 コワーキング運営事業者 ベンチャーキャピタル アクセラレーター コンサルティング事業者 調査事業者

教育機関・行政機関

- 大学・大学院
- 省庁
- 地方自治体

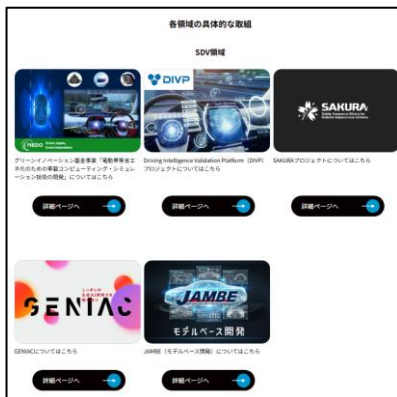
(参考①) モビリティDXプラットフォームの概要 (情報発信)



- 2024年9月からWebサイトを開設し、モビリティDXプラットフォームの活動を継続的に周知するとともに、関連するイベント情報やSDV関連技術の学習講座情報、政策動向に関する情報を集約して発信。
- 10月にモビリティDXプラットフォームをローンチ後、2024年度は会員向けにニュースレターを隔週で計10回配信。ニュースレターには、モビリティDXプラットフォームのイベント情報や政策動向、国内外のモビリティDXに関連するニュースを掲載。2025年度は新聞記者がモビリティDXプラットフォームと類似の場づくりに取り組むプレイヤーを中心に取材し、計10記事を配信。

Webサイトでの情報発信

- イベントの開催案内を掲載するとともに、モビリティDXプラットフォームで実施したイベントについては、イベント終了後、当日の動画や説明資料をWeb上に掲載。
- 経産省が実施する複数のモビリティDX関係事業のWebサイト、経産大臣が認定するモビリティDX関係講座を一覧化。



メルマガでの情報発信 (会員向け)

- ニュースレター掲載情報 (2024年度)
 - ✓ モビリティDXプラットフォーム実施イベントの開催案内、アンケート結果、参加者からの意見
 - ✓ 関連イベントの開催案内
 - ✓ モビリティDX戦略策定後の政策の進捗
 - ✓ モビリティDX関連の国内外最新ニュース



- 取材記事内容 (2025年度)
 - ✓ モビリティDX戦略アップデート
 - ✓ Japan Mobility Show
 - ✓ 自動運転AIチャレンジ
 - ✓ Vehicle Cybersecurity Competition
 - ✓ SDVスキル標準
 - ✓ API標準化
 - ✓ ソフトウエア人材育成拠点



(参考①) モビリティDXプラットフォームの概要 (人材確保)

- SDV化に対応するため、ソフトウェア人材の確保 (獲得・育成) は喫緊の課題。
- 重要な人材像を可視化するスキル標準整備や講座拡充、人材の裾野拡大に向けたイベントの実施など、協調領域の取組を推進。

新規コンテンツ作成

- 人材確保の取組を効率的に進めるためには、タスクのレベルとスキルセットを体系的に整理した「スキル標準」の策定が重要。SDVに対応したキャリアと必要なスキルセットを整理した「SDVスキル標準」を自動車技術会において検討。「SDVスキル標準」について広く関係者が参照できるよう、「SDVスキル標準の解説書」をWebサイト上に公開。
- SDVにおいては、OTA(Over The Air:無線通信を経由してデータを送受信すること)によるソフトウェア更新の導入が必須となっている中、OTAフレームワークの1つである「Uptane」を取上げ、OTA Updateの基礎とUptaneの機能及びセキュリティ対策アプローチを学習するための新規講座を作成し、Webサイト上に公開。誰でも自由に受講が可能。

SDV時代のしごと図鑑：SDV開発人材の31職種

プロダクト・サービスマネージャ	システムアーキテクト	UXデザイナー
プロジェクトマネージャ	ソフトウェアエンジニア (アーキテクト)	UXエンジニア
プロジェクトマネージャ	ソフトウェアエンジニア (プログラマー)	SDV品質コントロール
QAスペシャリスト	テストエンジニア (システム)	SDVアーキテクト
プロダクトオーナー	テストエンジニア (ソフトウェア)	SDVインテグレーター
スクラムマスター	テストエンジニア (ソフトウェア)	
HRD	キャリアカウンセラー	
デバイスエンジニア	インテグレーション	
データサイエンティスト		
In-Carセキュリティスペシャリスト	クラウドエンジニア	開発プロセススペシャリスト
In-Carセキュリティスペシャリスト	クラウドエンジニア	DevOpsエンジニア
	クラウドエンジニア	開発管理エンジニア
	クラウドエンジニア	システムエンジニア
	クラウドエンジニア	開発管理エンジニア



イベント実施

- 実際に実機を動かす機会を提供することは自動車のソフトウェア開発の魅力を訴求する上で重要。「自動運転AIチャレンジ」や「自動運転ミニカーバトル」等の関連イベントをWebサイトやメルマガで周知。
- より多くの人に自動運転に興味を持ってもらい、理解してもらうため、自動運転のUXに着目したアイデアソンを実施。自動運転が社会に受容され、人々の生活がより良くなるための、移動体験のアイデアを募集。(約80名参加)
- ソフトウェア人材を対象に産学官連携の情報発信イベントを実施。国の政策の方向性やSDVスキル標準を説明するとともに、IT業界出身者がどのようなスキルを活かせるのか、業界特有の課題ややりがいパネルディスカッション形式で発信。(約270名参加)



(参考①) モビリティDXプラットフォームの概要 (企業間連携)



- モビリティDX関係の様々なテーマについて、会員の取組事例のプレゼンテーション、ディスカッション、ネットワーキング等を行い、プラットフォーム会員同士の交流を促進するとともに、モビリティDXに関する知見を深めることを目的とした、会員交流イベントを東京で2回、名古屋で1回開催。
- 更なる協業連携促進に向け、大企業とスタートアップのビジネスマッチングを目的としたイベントを1回開催。

会員交流イベントの実施

- 大学やスタートアップ、ソフトウェア事業者など国内外の多様な関係者が参加。イベントはオンラインでも配信。イベント会場には、車内音響体験ブースの設置や実車両を展示。

【開催概要】

	第1回	第2回	第3回
日時場所	2024年12月17日 東京	2025年1月16日 名古屋	2025年2月7日 東京
テーマ	SDVの車室空間の充実に向けて	「モビリティ産業」の創出に向けて	SDVのグローバルな取組・議論の潮流
キーワード	エンタメ、AI	異業種、スタートアップ、自治体	グローバル
参加者数	約160名	約440名	約280名
登壇企業名	ホンダ, Microsoft, VicOne, Dolby, AMANE	トヨタ, ソニー, May Mobility, ムービーズ, イービー愛知, Bashow, AZAPA	Tesla, Bosh, クアルコム, デロイトトーマツコンサルティング



ビジネスマッチングイベントの実施

- 大企業4社より、モビリティ関連領域において具体的に関心のある事業領域や協業を進めたいスタートアップ等について、プレゼンを行い、その後ネットワーキングを実施。

【開催概要】

日時場所	2025年3月5日 東京
参加者数	約80名
登壇企業名	ホンダ デンソー 中部電力 ソフトバンク



(参考②) 民間事業者主導のエコシステムに必要な機能例

01

戦略構築機能

国の方針等を基に、エコシステムの長期的かつ持続的な成長と拡大の戦略を検討し、牽引する

02

コミュニティ
マネジメント機能

業界/領域の壁を超えて、様々なプレイヤーの間をつなぎ、エコシステムを盛り上げる

02a

情報集約・発信機能

業界/領域の専門家や専門知識の情報を把握し、業界/領域の言語の違いを踏まえて発信する

02b

イベント企画・運営機能

コンペティションやミートアップなどエコシステムに関わるプレイヤーが集まり交流する場を企画、運営する

03

人材の越境促進機能

ハードウェア×ソフトウェア人材等を育成するためのスキルの可視化・共通言語化や教育の提供

(参考③) 民間事業者主導のエコシステムに必要な機能に関する取組事例

(五十音順)

01

戦略構築機能

02

コミュニティ
マネジメント機能

02a

情報集約・発信機能

02b

イベント企画・運営
機能

03

人材の越境促進機能

インディー ドリクルー トパートナ ーズ	SCSK	Open SDV Initiative	慶応大学 SDM研究 科西村研究 室・シーメ ンス	自動車 技術会	ティア フォー	TECH PLAY-X	日本自動車 工業会	42Tokyo	PwCコン サルティ ング	VicOne	みずほ銀行	WWJ
9p	10-11p	12p	13p	14-15p	16p	17p	18p	19p	20p	21p	22p	23p

株式会社インディードリクルートパートナーズ

SDV推進に向けた異業界エンジニア流動化促進

戦略構築

イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント



プロジェクトの目的

・SDV領域ではソフトウェア・AI等のIT人材需要が急増している一方、自動車業界内からの人材移動のみでは、人材供給に制約が見込まれる。
そのため、IT・Web等の異業界から自動車OEM・サプライヤーへの転職の魅力を伝えることで、産業横断での人材最適配置を目指す。

プロジェクト概要

- ① エンジニア向けYouTubeセミナー施策
・SDV領域の技術トレンドやOEMにおける役割変化を発信。IT/Web系人材に対し、自動車業界を新たなキャリア選択肢として提示し、異業界からの転職意向を醸成。
- ② 社内勉強会による転職動向の変化把握・促進
社内勉強会を通じてSDV関連求人・転職事例を共有。従来はSIerや社内SEが中心であったIT人材の転職において、自動車業界への転職好事例が出始めており、業界越境転職の兆しが見えてきている。

今後の取り組み

- ①セミナー内容の専門領域別高度化による転職意向の更なる喚起
- ②OEMとの連携強化による受け入れ環境整備
- ③業界越境転職モデルの確立・横展開

関連リンク

・【特別公開】大手企業登壇の最新セミナー（アーカイブ） - YouTube

SDV/SDM共創基盤

(完成車・Intelligent Cockpit・SPF Gen5・データ共通基盤)

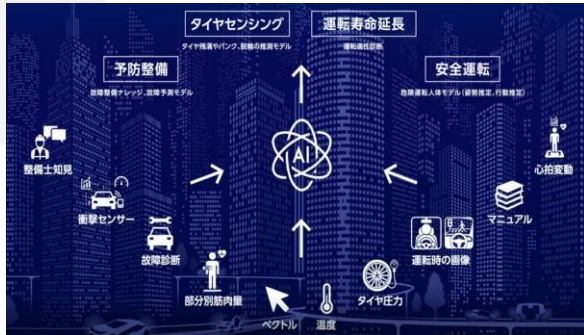
戦略構築

イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント



プロジェクトの目的

完成車、車内体験、共通実装基盤、データ連携基盤を一体で捉え、単一企業で完結するのではなく、多様な企業・業種が参加しながら価値を持ち寄る「みんなで作る」モビリティの共創実証基盤を形成する。特に、車室内を起点とした顧客接点、継続更新可能なソフトウェア基盤、業界横断のデータ連携を組み合わせることで、モビリティと社会をつなぎ、異業種連携や地域課題解決にも広がる業界横断型エコシステムの具体化を目指す。

プロジェクト概要

完成車を「共創の器」、Intelligent Cockpitを異業種が価値を提供しやすい「顧客接点」、SPF Gen5を継続実装・更新を支える「共通基盤」、SCSKモビリティ共通基盤を業界横断の「データ連携基盤」として一体で推進。JMSではSDV車を9か月で開発し、エコシステム型開発による短期開発の可能性を示した。さらに、保険、物流、エネルギー、観光、地域サービス等との連携に加え、自治体MaaSや物流DXにもつながる社会実装テーマを展開している。

今後の取り組み

異業種が「見つける → 試す → 実装する」まで進みやすい参加導線を設計し、継続参加につながる民間エコシステム形成を進める。異業種が参加しやすいテーマ設定、接続条件、役割分担を整理するとともに、車内UX連携、アプリ実装・更新運用、データ連携の共通ルール整備を進める。また、自治体MaaS、物流、安心安全、バッテリー循環等の具体領域で実装を広げ、継続的に価値を育てる民間エコシステム形成につなげていく。

関連リンク

<https://www.scsk.jp/jms/presskit.zip>

異分野を含む将来エコシステムへの参画に向けた施策案と実行例

異業種企業の「知る・試す・実装する」を容易にする参画パスの設計と、それを具現化する共創例

施策案

A. エントリーポイントの明確化

レイヤ別のテーマ設定
ユースケースのメニュー化
どの業種がどこに参画可能かを「見える化」

B. 参加したくなる仕組み

共創実証の場の常設化
共通基盤・共通ルール提示
試しやすい場と容易につながる仕組みの整備

C. 継続参加を促す仕掛け

段階的参加モデル
人材育成・コミュニケーション強化
PoCから実装・運用まで継続しやすいフロー設計

実行例

A 展示会を利用した発信

エコシステムで開発した完成車を「共創の器」として展示し、異業種にも参画可能性を見せた

エコシステム先：
完成車メーカー、部品メーカー、ソフトウェアメーカー、クラウド事業者、異業種 他

B プラットフォームを利用した連携

複数企業が参加しやすい実装・データ連携の共通基盤を整備

エコシステム先：
クラウド事業者、ソフトウェアメーカー、アプリケーションメーカー、異業種、自治体 他

B InCar/OutCar連携部品のMVP開発

保険・物流・エネルギー・地域サービス等と接続できる顧客接点を構想

エコシステム先：
部品メーカー、クラウド事業者、通信事業者、アプリケーションメーカー 他

共創ハブ
(オーケストレーター)

SCSK

C 車載プロダクト製品化・市場展開の共創

半導体・顧客・販売パートナーと連携し、再利用可能なソフト資産を展開

共創先：
BSWメーカー、半導体ベンダー、販売パートナー 他

C 車載・IT・AI・運用の混成チームで企画・実証・基盤整備を進め、異分野連携を担える実践型人材を育成

車載 × IT × AI × 運用の横断知見を組み合わせ、共創を支える実践知を蓄積

Open SDV Initiative

オープンSDVのためのビークルAPIの策定と人材育成

戦略構築

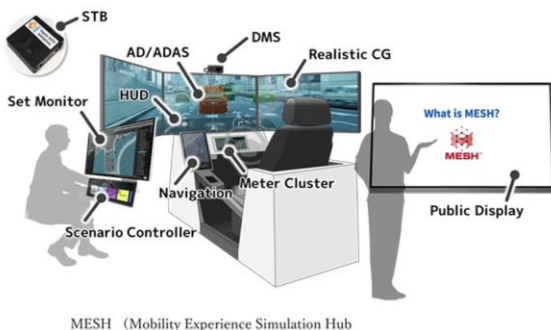
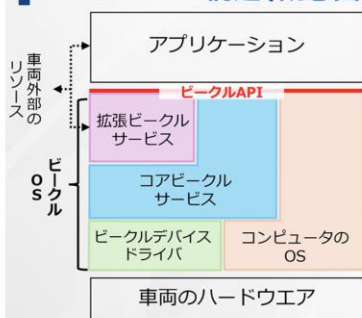
イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント

ビークルOSの構造(概念図)



プロジェクトの目的

- オープンSDV※のためのビークルAPIの策定
 - SDV人材の育成
- ※ サードパーティ (OEMやその委託先以外の組織や個人) が開発したアプリケーションをインストールすることができる自動車のこと。

プロジェクト概要

- モビリティDX戦略において、「サードパーティの参入が進み、車両を活用したサービスが拡大する」など、ビークルAPIの標準化の必要性が指摘されている
- 名古屋大学が産業界に呼びかけて、望ましいビークルAPIを策定する活動を実施。2026年4月時点で約60社が参加。半年に1回、その時点の仕様を公開
- 策定したビークルAPIは標準化団体に提案
- 策定したビークルAPIを実車やシミュレータ上にテスト実装し、有効性を評価
- オープンSDVが提供するサービスを体験するためのシミュレーション環境 (MESH) を開発
- これらの活動を通じて、SDV人材を育成

今後の取り組み

- ① ビークルAPI仕様の策定・ブラッシュアップの継続と標準化団体への提案
- ② API評価のためのシミュレータや実車を用いたPoCの開発
- ③ オープンSDVにより実現可能となるサービスの検討
- ④ オープンSDVが提供するサービスを体験するためのシミュレーション環境 (MESH) の開発

関連リンク

Open SDV Initiative : <https://www.nces.i.nagoya-u.ac.jp/osdvi/>

Open SDV API仕様 バージョン202603a (発行 : 2026年3月31日) : <https://www.nces.i.nagoya-u.ac.jp/osdvi/#section2>

慶應義塾大学SDM研究科西村研究室、シーメンス株式会社

SDVのシステムズエンジニアリング・ハッカソン

戦略構築

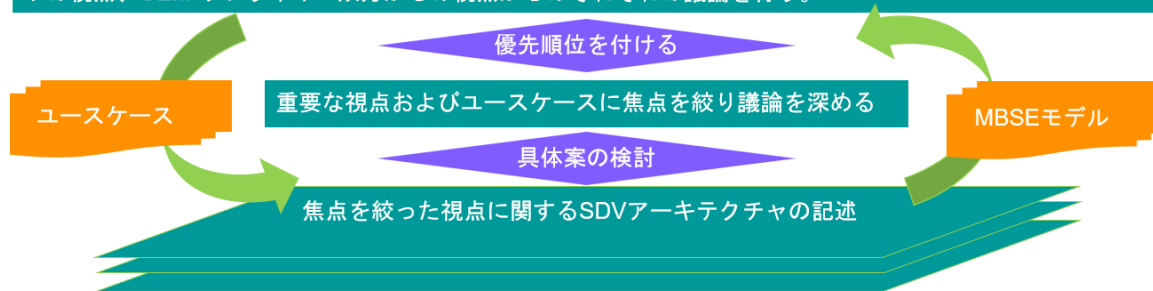
イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント

SDVに関連するインカー・アウトカー開発について、将来にわたる課題（価値提供、コスト妥当性など）を含めた様々な状況を踏まえ、SDVのライフサイクル全体を通じたコンテキストおよび主要なユースケースを洗い出す。特に、HWおよびSWを包括するシステムの視点、SWスタックの視点、OTAによるSWアップデートの視点、OEM-サプライヤー双方からの視点からのそれぞれの議論を行う。



- システムズエンジニアリングプロセス（要求定義・検証・妥当性確認）に基づくシステム記述モデル（MBSEモデル）の構築
- OEM、サプライヤーがWin-WinにSDV開発をできる基本的なフレームワークの定義（責任・役割分担を含む）

- ソフトウェア仕様の定義
- ソフトウェア仮想検証方法の定義
- デジタルツイン実現に必要な能力の定義
- ALM/PLMを用いた構成管理・PLE
- EEアーキテクチャの仕様と設計

プロジェクトの目的

SDV（Software Defined Vehicle）に関するユースケースを含めたシステムコンテキストのレベルから、ソフトウェアの開発およびアップデートを考慮したシステムズエンジニアリングアプローチを明確にすること、およびこの活動を通じた人材育成を目的としている。

プロジェクト概要

- SDV開発に関連する専門家の意見と協調領域を見極めるためのハッカソン形式の取り組み
- SDVに関するユースケースを考え、機能開発のみならず、車内外の複雑に関連する要素を熟考した上での、ライフサイクルに基づくテスト戦略および要求の定義
- 協調領域である、標準化されたAPI、OS-ミドルウェア等をシステムレベルから考慮し活用するための検討
- AIを取り入れたプロセスに対応するためのライフサイクルを考慮したシステムモデルの記述とデジタルプラットフォームの検討
- 実施頻度：毎月一回@慶應義塾大学日吉キャンパス

今後の取り組み

- SDVのシステムズエンジニアリング・ハッカソンのこれまでの取り組みをフェーズ1とし、これを基にフェーズ2として、ソフトウェアアップデートのユースケースを増やし、システムズエンジニアリングの活用の効果を精査する。
- SDVに対するシステムズエンジニアリングを推進するための、AIを活用するデジタルプラットフォームのあるべき姿を描く。
- ①,②を通じて、SDVの実現に向けた人材育成を含む組織、プロセス、アーキテクチャを定義する。

関連リンク

<https://www.siemens.com/ja-jp/products/capital/offerings/software-developer-ibm-rhapsody/>
<https://www.siemens.com/ja-jp/digital-thread/mbse/software-defined-vehicle/>

“くるまからモビリティへ”の技術展

- 戦略構築
- 情報集約・発信
- コミュニティマネジメント
- イベント企画・運営
- 人材の越境促進



“くるまからモビリティへ”の技術展

KuruMobi Tech Expo - from Cars to Mobility

オンライン展示会

2026.11.16(月)～12.11(金)

リアルイベント

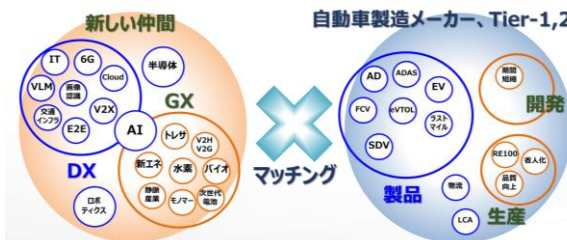
2026.11.27(金)

東京国際フォーラム



プロジェクトの目的

自動車技術及び産業がDX・GX・エネルギー・インフラ等の新しい知見や仲間と共創し、将来のモビリティにイノベーションを引き起こすための「場」を提供する



プロジェクト概要

専門や慣習が異なる仲間同士を以下の3ステップで繋ぐ

- ①オンライン展示：技術・企業情報の事前発信（スクリーニング）
- ②オフライン展示：プレゼンテーションと面着説明→Q&A
- ③交流会：多対多で議論→個別相談→連携機会の創出

今後の取り組み

- ①テーマの拡充
 - ・社会課題とその課題を解決する技術を有するステークホルダの交流
 - ・自動車メーカー、Tier-1が抱える課題を解決する技術を有するスタートアップ企業との交流を深める「場」を提供する
- ②本会の既存展示会(人とくるまのテクノロジー展)、学術講演会等との連携による発信力強化

関連リンク

“くるまからモビリティへ”の技術展：<https://expo-info.kurumobi.jsae.or.jp/ja/>

自動運転AIチャレンジ

戦略構築

イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント



プロジェクトの目的

- 優秀な人材の発掘・育成、自動車業界への橋渡し、若手技術者の育成と技術交流を促進
- 現役・過去参加者がコミュニティを通じて相互に学び合うことで、新たな専門技術を短期習得する機会を提供

プロジェクト概要

- **Sim to Real SW部門**
 - ・モビリティを動かす楽しみを裾野の広い技術者に提供
 - ・ルールベースのアルゴリズムによって競う
- **End to End AI部門**
 - ・最新技術に取り組む機会を技術者に提供。
 - ・機械学習アルゴリズムのソフトウェアを自由に作成しシミュレーションで競う

今後の取り組み

競技内容の拡充（検討中）

- 社会的なAI品質マネジメントの動向インプットと、自動運転タクシーのリスクワークショップ（W/産業技術総合研究所）
- 通信による情報の共有と協調制御（V2X）に関する教育体験（W/東京大学モビリティ・イノベーション連携研究機構）

関連リンク

自動運転AIチャレンジ：<https://www.jsae.or.jp/jaic/index/>

株式会社ティアフォー

オープンソースを基盤とした人材育成・発掘支援

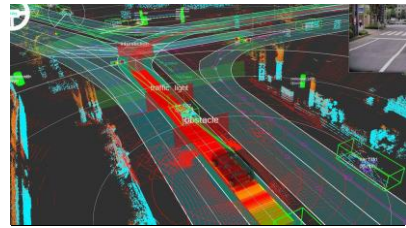
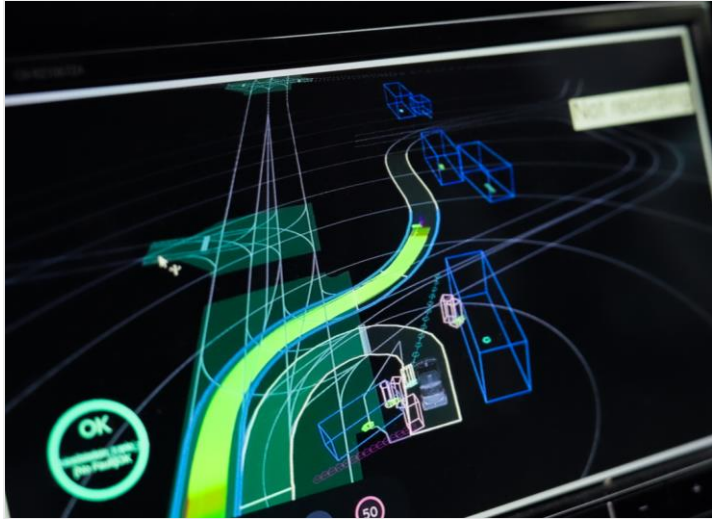
戦略構築

イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント



プロジェクトの目的

自動運転用オープンソースソフトウェア「Autoware」を基盤とした実践型競技会や自動運転講座の提供を通じて、AIを含むソフトウェアとハードウェアの両域に精通した高度人材の発掘・育成、コミュニティ形成、産学官連携の促進を実施し、日本のモビリティDXエコシステムの持続的な発展に寄与する。

プロジェクト概要

自動車技術会が主催する「自動運転AIチャレンジ」の運営支援に加え、zero to oneが展開する「自動運転システム構築完全講座」の制作・監修を支援。競技会では、シミュレーションを用いた予選から実車を用いた決勝へと繋がる段階的な競技設計を行い、講座ではスキルの可視化と共通言語化を推進。これら一連の活動を通じて、多角的な人材育成と産学官コミュニティの形成を支援。

今後の取り組み

- ① 2026年度の「自動運転AIチャレンジ」では、新たにEnd-to-End AI部門を新設。機械学習ベースの開発を担う人材へと対象を広げ、データエンジニアリング、アノテーション設計、機械学習モデル構築など実践的な技術力を養成。
- ② 産業技術総合研究所との連携により、大会期間中にAI品質マネジメントのワークショップを開催予定。座学と実践型プログラムを組み合わせ、安全性を前提とした開発文化の醸成を目指す。
- ③ 東京大学塚田研究室との連携により、柏ITS実験フィールドにV2X実証環境を整備予定。シミュレーションと実機を高度に連携させた次世代競技基盤を構築し、技術実証と人材発掘の両立を図る。

関連リンク

株式会社ティアフォー：<https://tier4.jp>
自動運転AIチャレンジ公式サイト：<https://aichallenge-board.jsae.or.jp/>
自動運転システム完全構築講座：<https://zero2one.jp/product/self-driving-car-01/>
The Autoware Foundation：<https://autoware.org/>

株式会社TECH PLAY-X

トヨタ・日産・ホンダ3社合同
ソフトウェアエンジニア向け技術イベントの開催
<TECH DRIVERSシリーズ>

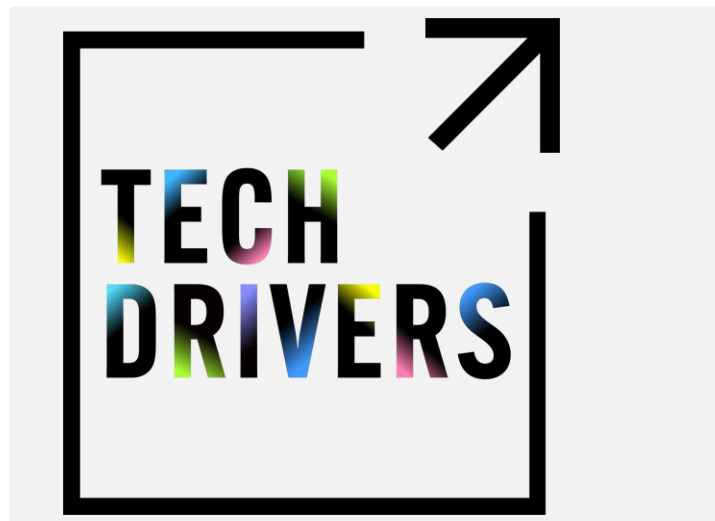
戦略構築

イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント



プロジェクトの目的

イベントを通じて、自動車業界におけるソフトウェア技術の進化に関する認知を拡大し、将来的に自動車業界で働くエンジニアの増加を目指す。

プロジェクト概要

異業界のゲストを招聘し、共通のソフトウェア技術をテーマとしたイベントを開催。2025年度は、UX、AWS、アーキテクチャなどをテーマに、小売業界、Web、ゲーム、金融など様々な業界を代表する計8社がゲストとして登壇。イベントは全7回開催し、累計4,000名が申込。ゲスト企業（一部抜粋）：イオン、DeNA、楽天グループ、カプコン、セブン銀行 など

今後の取り組み

自動車業界以外のエンジニアにも興味を持ってもらうためのイベントを、2026年も引き続き開催予定。昨年と同様に異業界ゲストを招聘しながら、自動車業界においてもソフトウェア技術の活用が進んでいることを認知してもらう機会を提供する。

関連リンク

昨年度実施したイベントは、以下リンクに掲載。
https://techplay.jp/contents/tech_drivers

一般社団法人日本自動車工業会

Japan Mobility Show Bizweek 2026

戦略構築

イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント



あなたが
動かす世界が
動く。

Your move
moves
the world.

10.13 Tue
- 10.16 Fri

幕張メッセ
Makuhari Messe

共創テーマ「7つのMOVE」



プロジェクト の目的

- 「豊かで夢のあるモビリティ社会の構築」を目指し、国内自動車メーカー、事業会社、スタートアップ/大学・研究機関、コンソーシアムなど、様々な産業が領域の垣根を超えて共創し、新たな価値創造を推進する。

プロジェクト 概要

- 「ブース出展」「ビジネスマッチング」「ステージプログラム」で構成する事業共創推進イベント。
- 「人・モノ」の移動にとどまらず、活用領域を広げている「モビリティ」を通じて、社会課題の解決や新たな価値創造という目的のもと、様々な産業から人々が集い、出会い、仲間の輪を広げていく場。
- 出会いだけで終わらない、社会実装に向けた共創を加速する、アクセラレーションプログラムも多数実施予定。

今後の 取り組み

- ①出展募集期間：2026年4月15日（水）～5月31日（日）
- ②イベント：2026年10月13日（火）～10月16日（金）幕張メッセ（国際展示場 展示ホール）※併催イベント：CEATEC 2026
- ③オンラインコミュニケーションツール「Meet-up Box」：常時登録および利用可能 ※改修・追加機能実装予定
- ④アクセラレーション・共創推進プログラム：参加者の課題に応じた具体的な共創支援の提供 ※同会場・会期にて実施
- ⑤未来モビリティ会議：豊かで夢のあるモビリティ社会の構築に向けた議論・発信を行うカンファレンス ※同会場・会期にて実施【秋頃に出展者および実施プログラムの詳細を発表予定】

関連リンク

オフィシャルWEBサイト：<https://www.japan-mobility-show.com/>
 オンラインコミュニケーションツール「Meet-up Box」：<https://jms-meetup-box.com/>
 プレスリリース：https://www.japan-mobility-show.com/press_release/2026/0415/
 Japan Mobility Show 2026 参加ガイド：https://www.japan-mobility-show.com/Show_Participation_Guide_for_Exhibitors.pdf

一般社団法人42Tokyo

自動運転ミニカーバトル

戦略構築

イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント



プロジェクトの目的

近年、自動車業界ではソフトウェア人材の確保が急務となっているが、業界内でのソフトウェアスキルの具体的な活用方法への理解はまだ十分ではない。この課題を解決するため、自動車業界において、ソフトウェアエンジニアが活躍する未来をリアルに想像できる場として、約3ヶ月間の開発コンテストを実施。

プロジェクト概要

「自動運転ミニカーバトル」とは、参加者がチームで電子制御できるミニカーを設計し、自動運転プログラムを実装してレースの最速タイムを競う、約3ヶ月間の開発コンテスト。参加者は定められたルールの中でハード/ソフト両面から工夫を凝らし、より速いマシンに仕上げられるよう改善を繰り返す。

今後の取り組み

42 Tokyoでは、引き続き自動車業界の企業様との連携を強化していく。自動車産業をはじめとしたものづくり業界でソフトウェアエンジニアとして働くことの楽しさを、より多くの方に伝えていくことを重要なテーマの1つと考えているため、今回のようなハッカソン、講演会やワークショップなどを通じて、一人でも多くのソフトウェアエンジニアの方々に、同業界に興味を持っていただくきっかけを創出していく。

関連リンク

<https://42tokyo.jp/landing/autonomous-minicar-battle/>
https://42tokyo.jp/news/2026-03-04-h_mr-bk2g/
<https://www.mobilitydx.go.jp/journal/008/>

PwCコンサルティング合同会社

スマートモビリティ総合研究所

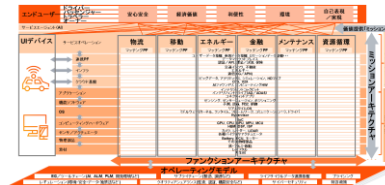
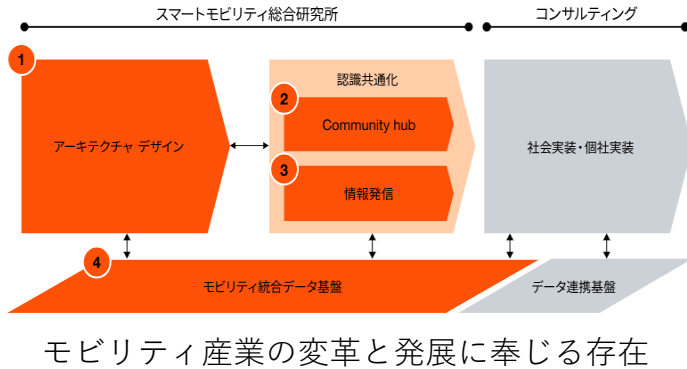
戦略構築

イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント



アーキテクチャデザイン



Community Hub

プロジェクトの目的

コンサルティングの枠を超えて、モビリティ社会システムに係わるステークスホルダーの企業内連携、企業間連携、産業間連携の加速

プロジェクト概要

- ① **アーキテクチャデザイン**
課題を可視化し、産業の将来像をデザイン
- ② **Community Hub**
リアルな共創の場を提供、情報や知見の発信
- ③ **情報発信**
最新動向や予測をWebやセミナーを介して提供
- ④ **モビリティ統合データ基盤**
アーキテクチャを元にデータを集約し、変革を支援

今後の取り組み

- ① スマートモビリティ産業のアーキテクトの具体化
- ② 継続的な共創の場の提供、定期的なセミナーの実施
- ③ 市場調査・分析内容の発信、セミナーやその他活動内容の定期的な発信
- ④ 統合データベース構築と活用事例の蓄積

関連リンク

スマートモビリティ総合研究所の概要

<https://www.pwc.com/jp/ja/services/consulting/smart-mobility-innovation-hub.html>

<https://www.youtube.com/watch?v=3FSgH2TirP0>

Community Hub

<https://www.pwc.com/jp/ja/press-room/2025/community-hub.html>



プロジェクトの目的

SDV、AIをはじめ技術進化の激しい自動車業界において、必須の技術と言えるサイバーセキュリティの認知向上、人材確保、専門知識向上のためのトレーニング機会を提供。また、業界内外のセキュリティ人材のコミュニケーションの場づくりに貢献する。

プロジェクト概要

- サイバーセキュリティに関する専門知識や技術力を競い合う自動車サイバーセキュリティコンテストを実施。
- コンテスト前には、意義の理解や関心向上を目的として、プレセッションを実施することで、参加を促進。
- 参加者は2024年はオンライン予選上位チーム、2025年はGlobal大会上位チーム及び公募によるエントリーチームが参加。上位チームには表彰等の栄誉が与えられた。

今後の取り組み

2024年以降実施してきた本取組自体の認知も年々高まっているため、2026年以降も継続し、自動車におけるサイバーセキュリティの必要性の理解、認知向上、専門知識向上、人材育成に寄与していく。
J-Auto-ISAC、自動車技術会などのサイバーセキュリティ関連の業界団体の活動とのシナジーを生むため、協力も視野に、本イベントの日本国内、業界内での定着を図る。

関連リンク

<Automotive CTF Japan 2024について> <https://vicone.com/jp/automotive-ctf>
<VCC Japan 2025について> <https://vicone.com/jp/vehicle-cybersecurity-competition>
<モビリティDXプラットフォーム記事> <https://www.mobilitydx.go.jp/journal/006/>

モビリティ分野における大企業とスタートアップの協業連携の促進

戦略構築

イベント企画・運営

情報集約・発信

人材の越境促進

コミュニティマネジメント



プロジェクトの目的

- 大企業(自動車産業および異業種)においては、スタートアップとの連携に大きな伸びしろがあると認識
- モビリティ分野におけるスタートアップ × 大企業の連携の促進を図る

プロジェクト概要

- イノベーション企業支援部内に、オープンイノベーションを推進する専門チームを立上げ。〈みずほ〉の産業知見と広範な大企業/スタートアップネットワークを活かし、共創の場づくりを推進中
- その一環として、大企業4社とスタートアップ数十社が一堂に会し、モビリティ領域における知見向上と事業連携について議論を深めるイベントを開催

今後の取り組み

- 大企業の持つアセット(特許・資金等)の活用に向けて、以下の観点から、スタートアップの成長支援/社会実装を積極的に実施
- ① SDVコア技術 (OTA/車載OS/AIセキュリティ等) を有するスタートアップへの早期出資・融資を通じた成長加速の実現
 - ② モビリティ領域の大企業に対して、関連技術(先進AI技術等)をもつスタートアップの紹介と連携推進
 - ③ 非モビリティ領域 (通信/半導体/エネルギー等) の大企業と①のスタートアップとの連携推進 (コンソーシアム/JV等)
 - ④ 個別のモビリティ領域大企業と連携して、当該大企業の投資するモビリティ領域スタートアップの支援(将来的な海外展開も展望)

関連リンク

2024/12/12 みずほフィナンシャルグループの「モビリティDXプラットフォーム」参画について
<https://www.mizuho-fg.co.jp/dx/articles/mobility-dx-platform/index.html>
 2025/3/5 モビリティDXプラットフォーム「スタートアップ協業連携イベント」開催
<https://www.mobilitydx.go.jp/event/event07.html>
 みずほ銀行が運営するスタートアップのアクセラレーション会員サービス「M's Salon」特設サイト
https://www.mizuhobank.co.jp/corporate/b_support/ms_salon/special/index.html



のべ170名以上参加の
テーマ別イベントでは

8件

以上の商談が実現

招待制企業座談会では

20名超に

個別のお繋ぎを実現

プロジェクトの目的

WeWorkに入居するモビリティに関連する企業に継続的な出会いの場を提供し、WeWorkがハブとなって交流を促進することで、協業やイノベーションを創出する。

プロジェクト概要

モビリティ業界のあらゆる人々が定期的集うイベントを実施し、持続的な交流・共創を行うことで、モビリティの未来を加速させるためのオープンなコミュニティを運営。テーマ別ピッチイベント、Meet upイベント、協業連携可能性の高い企業を個別に招待する特別座談会の実施を通じて広く、具体的な繋ぎを実現。

今後の取り組み

① 技術発信の場の創出

WeWorkに入居するMobility企業による技術発信を通じて、新たな気づきと発見のきっかけを創出し、協業や受発注を定期的に生み出す場を創出する。

② Mobilityの最前線を体感

最新トレンドをビジネスチャンスへ変換するためWeWork入居するたような企業の知見をシェアするネットワーキングや、話題のテーマ（自動運転・EV・MaaS・物流DX等）に合わせた時流を捉えたMeetupイベントを企画/実施する。

③ 官民連携による共創加速

WeWorkに関わる多くの地方自治体、政策担当者を招き、入居企業を交えた意見交換会や、マッチング、ピッチイベントを企画/実施する。

関連リンク

モビリティDXプラットフォーム x WeWork これまでの連携実績

- ・コラボイベント「テクノロジーで描く交通事故ゼロの未来」イベントレポート<https://wework.co.jp/contents/report/251113>
- ・コラボイベント「二次交通・交通空白地の課題に挑む」イベント概要<https://wework.co.jp/events/mobility-project-lap3>
- ・連携プレスリリース<https://wework.co.jp/news/250917>

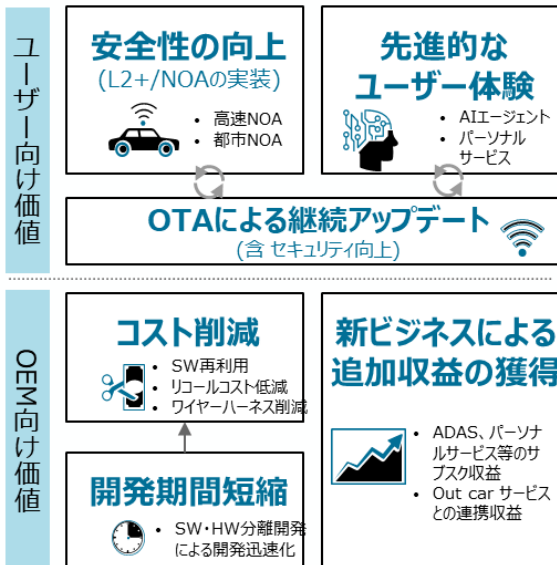
(参考④) 第1回AI・半導体WG 事務局説明資料抜粋 (2026年2月12日)

SDV化の進展

AI

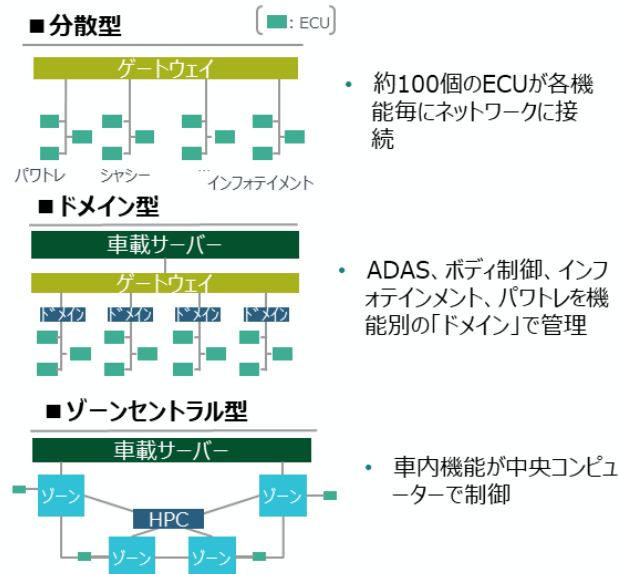
- SDVは、ソフトウェアを通信によりアップデートすることで、自動車性能（自動運転機能など）の継続的な向上、体験価値の継続提供等が可能となる。
- 高効率・高頻度でソフトウェアのアップデートを行うために、米中を中心にECUを集約・統合。こうしたE/Eアーキテクチャの変化と合わせて、ミドルウェア、OS、半導体など車全体のアーキテクチャも変化し、レイヤー化が進展。
- こうした変化に伴い、組織マネジメントや産業構造が変化すると共に、ソフトウェアとハードウェアの分離、モデルベース開発等のデジタル化が進み、開発期間は短縮。AIの活用やデータ駆動の開発も進むことで、体験価値の提供と開発・製造の効率化が更に加速。

SDVによって実現される価値



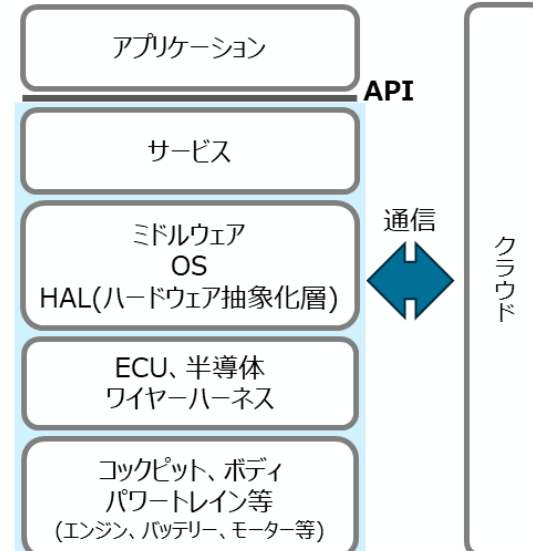
出典：各社対外公表やエキスパートインタビューを基に経産省作成

E/Eアーキテクチャ例



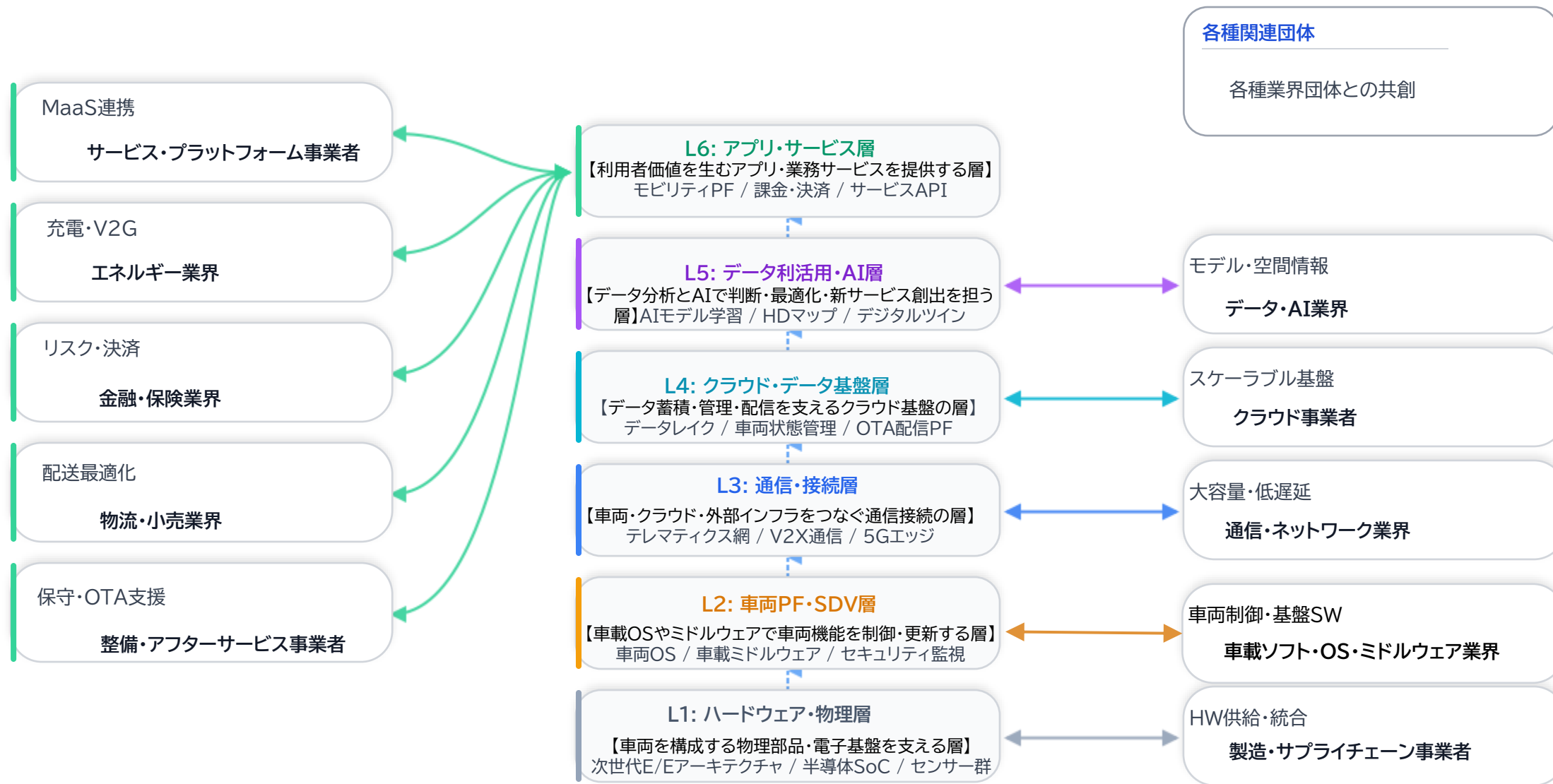
※E/Eアーキテクチャには様々な型があり、目的に応じて適切な型が選択されることになるが、基本的には分散型の状態よりはECUは集約・統合化されていく。

SDVにおけるレイヤードアーキテクチャ



※例えば、高度な自動運転等では従来より複雑で負荷が大きい処理が必要となり、開発製造コストのかかる高機能半導体や熱マネジメント、電力マネジメントがより一層重要になる。

(参考⑤) SDV時代のレイヤー別他業種連携図



産学官で構成されるモビリティ技術関連学会

モビリティ技術を支える多様な企業・団体・アカデミア・官公庁が参画する国内理工系最大の学術団体(個人会員4.5万人、企業会員800社'25/10現在)

人と知をつなぎ、モビリティの未来を支える。



研究発表会・各種技術講演会



各種展示会

プロジェクトの目的

- ①モビリティ技術の研究成果の発信や交流する「場」の提供
- ②モビリティ技術に係る課題や将来技術の調査研究
- ③次世代のモビリティ技術者を育成
- ④自動車関連規格の制定や改正

プロジェクト概要

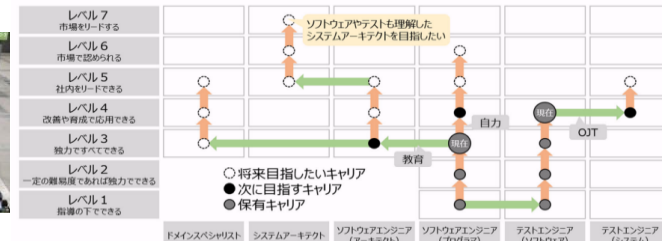
- ①春季・秋季大会／学術講演会 (参加登録者：8千人/年)
モビリティ技術展示会 (来場者：12万人/年)
人とくるまのテクノロジー展 (横浜、名古屋)
“くるまからモビリティへ”の技術展
各種技術講演会 (シンポジウム、フォーラム、公開委員会)
国際会議 (SETC、P、E & L、AVEC、EVTeC、FAST-zero等)の開催
- ②調査研究、課題解決を50のモビリティ技術専門委員会で実施
- ③100を超えるモビリティ関連の技術教育講座を提供
- ④国際規格：ISO/TC22・TC204の国内審議団体
国内規格：JIS原案作成およびJASO規格制定を担う団体

今後の取り組み

- 情報と体験・交流機会の提供
 - ・HPにモビリティDX関連のコーナーを開設し、裾野の広い関係者に向けて関連情報を共有するとともに、交流が促進される「場」へ育成
 - ・他学会・技術研究組合(CIP)・他団体と協調・共創し、幅広い技術の発信と体験・交流機会の提供を強化
- 育成コンペティションの新技术対応化
 - 「学生フォーミュラ」：電動化の推進
 - 「自動運転AIチャレンジ」：最新技術の取込み
 - 「学生安全技術コンペティション」：技術領域及び社会課題の拡大
- ソフトウェア技術者の育成強化
 - 「SDVスキル標準」：制度の充実と新規講座を開講
 - 「自動車技術ハンドブック」：ソフトウェア編、自動運転編を新規発行



学生フォーミュラ



SDVスキル標準 (キャリアプラン例)

関連リンク

自動車技術会HP : <https://www.jsae.or.jp/>

展示会、情報発信、メルマガ登録 : <https://guide.jsae.or.jp/>

学生安全技術コンペティション : <https://www.jsae.or.jp/assoc/event/student/sstdc/>

学生フォーミュラ : <https://www.jsae.or.jp/formula/>